序章　研究の課題と方法

第1節　研究課題

韓国（正式名称は「大韓民国」）には、さまざまな民族スポーツが伝承されている。たとえば、毛のついた小さな球を地面へ落とさないようにして、何回蹴ることができるかを競うチェギチャギ、おもに足を使う格闘技テコンドー、100 キロもある重い石を腹のうえに乗せ、力自慢を競う石かつぎ競争、丸太切り、互いに組み合って相撲をとるシルム、村を二分し引き合う綱引きなどがある。

こうした韓民族スポーツは、民俗学・人類学に考察されるべき興味深い数多くの問題をはらんでいる。これまで民族スポーツをめぐっていかなる考察が展開されてきたかは先行研究の検討において示されるが、本研究でおこなおうとするのは、1948 年に建国されて以来、韓国における韓民族スポーツの創造と変化の過程と、それをめぐる語りの分析である。全国民俗芸術競演大会、密陽百中戯、弓道、機池市里綱引きである。そして、これらの民族スポーツの創造の主体を「政府」とじっさいの「担い手」にわけ、それぞれの主体がどのような意図をもって関わっていたかを明らかにしようとするものである。それは第１に、民族スポーツを介して、ナショナルアイデンティティを創り上げていく上で、国家が一方的に、あるいは相当強い意志をもって働きかけてきたというのが今までの研究であった。しかし、国家というのはあくまでも片方の創造者であり、他方の創造者である担い手との相互関係のなかから、民族スポーツは創られていくという視点を欠くか、あるいはその展開が不十分にしかおこなわれなかったためである。第２に、上述の民族スポーツは韓国に広い分布と比較的豊富な資料をもつことがこれまでの諸研究からわかっており、したがって、これらに関して創造の視点から問題を考えてよい段階にあると判断されたためである。

なお、本研究の対象地域は、第１章では朝鮮半島全土で、事例研究の第２章は慶尚南道、第３章と第４章は忠清南道の地域である。（＜図１・２・３＞参照）

本論の構成は、以下のようになる。

まず本序章で、本研究の課題を述べた後、研究の視点や意義を明らかにしていく。次に中心的概念である「韓民族スポーツ」、「民族的帰属意識」、「国民文化」などについての説明を加え、さらに本研究の方法や過程について記す。最後に、韓民族スポーツに関する先行研究を整理し、その研究史の流れのなかに本稿がどこに位置づけられるかを論じる。

第１章では、韓民族スポーツの創造の主体を「政府」と位置づけ、政府主催の 1958 年から始まった全国民俗芸術競演大会を取り上げ、それを記述・分析するとともに、なかでも民族スポーツについて焦点をあてて述べる。そしてそこから政府がどのような意図をもって民族スポーツと関わっていたか、マクロな視点からアプローチし、考察する。

第２章からは、第１章の内容を踏まえながら具体的な事例を３つ取り上げ、もう一方の民族スポーツの創造の主体であるじっさいの担い手側の立場に立ち、彼ら/彼女らがどのような意図をもって民族スポーツと関わっていたかをミクロな視点からアプローチしていく。事例は密陽百中戯、弓道、機池市里大綱引きである。

第２章では、密陽百中戯について述べる。まず、密陽百中戯がどのような社会的・文化的文脈のなかでおこなわれていたのか、次にそれらが 1970 年代から 80 年代までの間、どのように創られ、変化していったのかを時間軸にそって検討する。さらに、社会的脈略、とりわけ担い手の社会的ステータスについても論じる。その際焦点をあてることになるのが、文化財として指定される以前における担い手である。

第３章では弓道について述べる。ここでは、今日韓国社会における一般的な弓道を取り上げるのではなく、南氏(ナムシ)門中の弓道を取り上げる。その理由は、かつて朝鮮時代において両班とされた南氏門中が弓道を介して、両班という社会階層のリバイバルをはかろうと意図しているためである。つまり、法律の上では存在しない、実体も存在しないが、両班というかつて存在していた階層が弓道という空間のなかでシンボリックにあらわれているのだ。これが彼らのアイデンティティを創りあげるのではないかと考え、創られた韓民族スポーツの特徴的な事例として、本章ではこの弓道を取り上げることにした。

第４章では機池市里大綱引きについて述べる。ここでは、建国後に創られたものだけを取り上げるわけではない。それまでずっとあったものが形を変えて、あるいは別の意識の下に、韓国の民族スポーツとしてその社会的に認識されるようになっていく様子を描く。ここでは、われわれという国民意識をもって綱引きが語られるということに焦点をあてていく。その際、語られる中身が本当か、どうかということは問題ではない．そのように意識して語り始めたのが重要な点となる。

終章においては、各章の考察を総括し、韓民族スポーツとナショナルアイデンティティについて再考する。

以上のような属性をもつ本研究の事例は、数としては限られているといえる。韓民族スポーツの多様性を、変数を設定して、それとの相関関係から体系的に分析するには、量的な調査が必要であるが、それは本研究の意図するところではない。本研究では、定量的分析では扱うことのできない、しかし韓民族スポーツを理解するためには必ず必要である、政府とじっさいの担い手両側からの視点を重視し、韓民族スポーツが一方によって創られたものではなく、両者の相互関係（互いに影響し、されながら）から創られるものとして捉えるために、双方からのアプローチを用いる。

第2節　用語の説明

1) 創られた（＝創造）

本研究でしばしば登場する「創られた（＝創造）」という語は、歴史社会学者によって用いられたInventionのことである。

かつて、エリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーは共著『創られた伝統 The invention of tradition』（1983年、邦訳1992年、紀伊国屋書店、韓国語訳1995年、서경문화사）のなかで、伝統は作り出されたものだと主張した。しかも、遠い昔から続いているようにみえる伝統も、じつは近代になって作られたものが結構多いというのである。近代における作られた伝統という言いまわしには、作り手の側に何らかの作意があったのだという認識が内包されている。伝統として何かある文化を作らねばならなかったのは誰で、その意図するところは何であったのかと問う姿勢が、彼らの主張には前提されていたのである（寒川恒夫、1999： 532）。

また、R・キージング（Keesing、 Roger M.）による1989年の論文 *Creating Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific*.（Contemporary Pacific 1(1 & 2):19-24）も看過することはできない。そのなかで彼は、文化的アイデンティティ・ポリティックス論を展開し、西洋的教育を受けて育った太平洋地域の島嶼国の知識人や政治的指導者たちが、学問的な裏づけもなしに、祖先たちが昔おこなったであろうと思われる一部分を取り出して、コミュニティ固有の伝統と同定し、理想化された過去を創造すると主張する。確かに、キージングの議論は、伝統の創造と若干異なる部分を持ち合わせているが、基本的にはホブズボウムらと同じベクトルを示しているといえる。つまり、このような考え方（「伝統の発明」や「過去の創造」）は、文化には本物があるということを前提として、文化を固定的に捉えており、その背景には本質主義的な考え方が横たわっているのだ。とはいえ、構築主義者の主張が正当性をもつとは、一概にいえないのである。

これまでの研究は「創られた（＝創造）」、あるいは「発明」という言葉が「伝統」と結びついた時、どうしてもネガティブに捉えてしまう傾向があると思われる。しかし、筆者は本研究において、むしろそれをポジティブに捉えることにする。なぜなら、創り手が国家であれ、民族であれ、あるいは個人であっても創造という行為は、生産的営みと考えているためである。

2) 韓民族

韓民族とは、「韓」と「民族」の合成語である。韓国社会において「韓」という言葉はその歴史が古く、それは百済、新羅、高句麗の三国時代以前に馬韓（マハン）、弁韓（ビョンハン）、辰韓（ジンハン）という三地域があったことから窺える。また1910年になされたのは「日韓併合」であって「日朝併合」ではない。このように韓国の「韓」には歴史的な由来がある。したがって、彼らは自分たちの住んでいる地域を「韓半島」と呼んでおり、自分たちの民族を「韓民族」と呼んでいる。韓国語、韓国映画、韓国料理も同様である。それにならい、本稿では現在の社会のことを「韓国」、慣用として伝統的な意味をもつものを「朝鮮」として使う。もちろんこれは絶対的な区分ではなく、どこまでも

相対的なものであって、筆者はこの区分に関して一切の政治的な意図をもっていない。なお、韓国は世界にまれにみる単一民族国家、単一言語国家であるために、韓国における国民性とは必然的に民族性のことを意味していることをここで断っておきたい。

3) 韓民族スポーツ

韓民族スポーツとは、韓民族の民族スポーツのことである。本稿では、韓国社会において古からおこなわれ、韓民族のアイデンティティ形成に機能すると想定される、今日に及んでいる諸種の伝統的スポーツを韓民族スポーツと定義する。しかもそれは、縄跳びやかくれんぼからシルムや綱引き、ゴッサウムや車戦まで、およそ遊戯のいっさいの形式を含めている。また、遊び手の老若男女も問わない。たとえば宗教的文化文脈のなかでおこなわれる遊戯であったとしても、それを民族スポーツと定義する。ただ、ここで 1 つ断っておきたいのは、現在の韓国には民族スポーツにうまく対応する用語がなく、それ自体韓国社会においてそれほど馴染み深いものではないことである。これまでアカデミックレベルをはじめ、一般の人々の間でも、広く用いられてきた語は、たとえば、「전통놀이ジョントンノリ（伝統遊戯)」、ないしは「민속놀이ミンソクノリ（民俗遊戯)」、「전승놀이ジョンスンノリ（伝承遊戯)」といった具合に多岐にわたって表現されていたのだ。これらがいつ頃から韓国語（あるいは、朝鮮語）の語彙に入ったか定かではないが、国民の広い層に定着したのは決して古いことではない。

4) 国民文化 (national culture)

より高度な文化を創り出すために、国家によってなされる意識的かつ組織的な営みを国民文化定義する。こうした国民文化とは、たんなるその母集団としての民族をこえた国民的レベルでの文化をいい、そのためナショナリズム（＝国家主義、国民主義、民族主義、国粋主義）的背景をもつ場合が多い。

5) ナショナル･アイデンティティ (national identity)：民族意識、民族的帰属意識

自己を民族に同一化することによって、できあがる確信や感情のことをいい、民族の統合性や一貫性を確保するものである。民族のどの要素に自己を同一化するかによって、ナショナル･アイデンティティは異なったものになるが、本研究では独自の伝統や文化を守ろうとする意識的な営みと定義する。

第3節 研究方法

主たる研究方法として本研究では、参与観察（participant observation）にもとづく現地調査、すなわちフィールドワークによる聞き取り調査を採用した。インフォーマントからの情報によって再構成される創られた韓民族スポーツは、事例によって、そのアプローチの方法に多少の違いがある。

まず、その内容がほぼ１世紀以上に渡るものもあれば、半世紀に渡るものもあり、さらにここ四半世紀のものもある。もちろん聞き取り情報だけでなく、資料（史料）や文献を必要に応じて用いている。そのため、20 世紀初めとそれ以前の情報に言及する事例も含まれることになった。

次に、それぞれの事例によって調査時期および期間が異なる。調査は、韓民族スポーツに関する先行研究の収集から始まった。まず韓国では、日本や諸外国ではなかなか手に入らない文献（とくに韓国語文献）もあるため、韓国国会図書館や国立中央図書館などを訪れ、その収集に努めた。また国立研究機関や政府の記録保存所、大学の図書館などにも足を運び、民族スポーツと関わる資料を収集した。こうした文献資料の収集はフィールド調査期間中にもおこない、補充調査の際もおこなっている。たとえば、調査地の役場や図書館、あるいは文化院などを訪ね、調査対象の民族スポーツに関わるものだけでなく、地域の歴史、文化、教育など幅広い分野での文献収集をおこなった。さらに日本では、著者の国籍に関わらず、主として日本語で書かれた韓民族スポーツに関する文献資料の収集に努めた。

フィールド調査についてであるが、第１章の全国民俗芸術競演大会（以下、「競演大会」と略す）については、1998 年の第 39 回大会が開催されたとき、その様子を参与観察するため、大会の会場（全羅北道益山市益山公設運動場）まで赴いた。そこでは、大会に出場していたいくつかの民族スポーツの担い手を対象に、聞き取り調査をおこなうとともに、大会関係者にも大会の運営について聞き取り調査をした。また大会に訪れた観客を対象に、アンケートによる意識調査も合わせておこなった。大会は初日の開会式を除けば、３日間にわたって開催された期間を通して観客がほとんどなく、大会関係者や演者だけであった。

第２章の密陽百中戯については、上記の競演大会の際、再演種目として出演していたため、そこでみることができた。それを契機に、1999 年に現地の密陽でおこなわれる密陽百中戯の参与観察計画を立てた。しかし、ほかの民族スポーツと開催時期が重なったこともあって、その年には調査ができなかった。結局、密陽のフィールド調査をおこなったのは２年後の 2000 年４月のことであった。それは毎年４月に開催される密陽文化祭の時であった。祭りではさまざまな民族スポーツやイベントが繰りひろげられており、その数は数十種目におよんでいた。たとえば、ブランコ大会、シルム大会、弓道大会、綱渡りなどといった伝統的な民族スポーツの競技大会もあれば、写真展覧会、美人コンテスト、歌謡コンクールなどといったきわめて現代的なものまでさまざまであった。当時、密陽百中戯はこうした密陽文化祭の随伴行事の１つとして賛助出演し、演じられていた。残念なことに、1998 年度の競演大会の際、密陽百中戯を演じていた人間文化財の２人は、すでに故人となっていた。そのため、彼らに密陽百中戯について、詳細なことを聞

くことができなかった。そのほか、何人かの演者も新しいメンバーに入れ替わっていて、表演が終わった後、密陽百中戯一団のリーダーと会い、研究の趣旨を伝え、調査協力を要請した。そして同年８月中旬に再度調査地を訪ねた。その時目にしたのは、政府によって義務づけられていた年に一度の公開公演であった。時間的な都合により、準備状況を見ることができなかったものの、密陽百中戯が演じられる全過程の様子を再度見ることができた。その後、密陽市立博物館を訪ね、インフォーマントの金在鶴氏（男、45 歳）から密陽百中戯に関するさまざまな情報を提供してもらった。また密陽文化院にも立ち寄り、密陽百中戯に関する資料だけでなく、地域の歴史、社会に関するものまで幅広く収集した。その後、インフォーマントの HYB 氏（男、42 歳）が経営する演劇村を訪ね、後述の HYB 氏の祖父、HBG 氏のライフヒストリーについて聞き書きをするとともに、密陽百中戯の現状についても話を聞くことができた。次に訪れた密陽百中戯の保存会では、助教を務める PDY 氏と出会い、主に文化財指定後の密陽百中戯に関する資料をいただいた。しかし、ここではどうしても文化財指定以前の資料を手に入れることができなかった。それは PDY 氏自身が本格的に密陽百中戯の保存・伝承に取り組んだのは文化財指定後のことであり、それ以前の資料を持ち得ていなかったためである。

第３章の弓道は、1998 年８月に早稲田大学村落研究室の矢野敬生教授に勧められ、共同研究を始めたのが大きなきっかけであった。同年 12 月に調査地を訪れ、桃李里の村長をはじめ、大勢の関係者と会い、調査協力を要請した。すでに 1991 年から毎年調査を続けてきた村落研究室による紹介もあって、調査しやすい部分もあった。その後、毎年調査地を訪れ、一定期間滞在し、調査をおこなった。調査期間は 1998 年 12 月と 1999 年３月、2000 年９月と 2001 年３月である。

第４章の機池市里綱引きについては、本文中に調査経緯について記してあるため、そちらを参照されたい。こちらの調査期間は 1999 年 10 月と 2000 年８月、2001 年３月と８月である。

以上、本研究における主な研究方法と調査経緯について述べてきたが、資料収集について、ある種の限界を認めたうえで、１つ断っておかなければならないことがある。それは韓国には本来文字化されず、口伝えで受け継がれてきた民族スポーツが多いことと、仮に当時文字化された資料があったとしても、それを後世に代々残さない独特な韓国の習慣があることに理解が必要だということだ。

とはいえ、そこで調査をやめるわけにはいかない。本研究における調査は現在も続いており、今後もなお、継続していく予定であることを最後につけ加えておく。

第4節　先行研究

この節では、韓民族スポーツに関する先行研究を紹介し、その研究史の流れにおける本稿の意義を明らかにする。韓国の民族スポーツに関する人類学・民俗学的研究は質量共に決して少ないものではない。とくに半世紀を経た今日、この分野は優れた研究と資料の多くの蓄積をもっている。しかし、ここではこの蓄積のなかから本研究内容と深く関係しているであろう、３つの研究のみを取り上げ、先行研究の検討として記述することにする。

（１）本田洋（1995）「郷土芸能はだれのもの？――現代韓国農村における民俗伝承の１側面――」『朝鮮文化研究２号：研究紀要』東京：東京大学文学部朝鮮文化研究室

この論文は、韓国湖南地方の一村落に伝わる民族スポーツＳクッを取り上げ、その記述・分析を通して、韓国の一農村の民族スポーツの伝承が現在どのような社会的、あるいは政治・経済的な基盤の上に成り立っているかを検討したものである。この研究では、Ｓクッがどのような社会的・文化的基盤と脈略のなかでおこなわれているのかを確認しながら、またそのおこなわれ方の変化を「民俗」の再確認と民族文化の固有化として考察の軸としている。現在、民族スポーツを演じ、楽しみ、所有する主体がどこにあるのかは広義の政治的問題であり、これは国家のなかの利害を異にする主体間の力関係のなかでしか解決し得ないと指摘する。しかし、本田はＳクッが創られたあとの変化に関心をおき、担い手がどのような意図、あるいは意識の下でそれを創り上げていったかについては、触れていない。

（２）本田洋、大野祐二、真鍋祐子、鈴木文子、秀村研二、丹羽泉（1996）「現代韓国社会における民俗文化」『青丘学術論集』８集、財団法人韓国文化研究振興財団、）

本研究は、韓国南原地方における２つの地域祭りを例に取り上げ、地域社会で生まれ育った民俗文化のあり方の変化について検討を加えているものである。また、国家の文化政策を大きく２つの枠組みとして捉えている。１つは、民族スポーツを文化財に指定し、国有化しようとする動きで、もう１つは、地域祭りの活性化である。この研究では政府による民族スポーツの創造に視点をおいているため、担い手によって創られる民族スポーツについては充分に検討されていない。

（３）岡田浩樹（2001）『両班―変容する韓国社会の文化人類学的研究』風響社

これは、忠清北道１村落の斐山高氏（仮名）の調査研究に基づき、韓国における社会・文化的変容について論じた著書である。今日の韓国社会を理解する上でも重要な文化的焦点でありつづける両班を正面から取り上げ、とくに「両班化」という概念を手がかりに、韓国の両班をめぐる錯綜した状況の解明を試みている。祖先祭祀（時享祭・忌祭）を中心に、今日なお強くみられる韓国人の上昇志向を「両班化」という概念（「両班化」とは「人々が行動様式を両班の理想型に近づけることにより、自らのステータスの上昇と維持をはかろうとする現象」であると説く）で説明し、これを韓国人が韓国人であるというアイデンティティを獲得し、他者（外国）とを区別

する「国民化」過程として捉えている。また岡田は、韓国における門中・チプを日本の同族や家と類比的な意味内容をもつ概念として（暗黙にしろ）規定し、韓国の門中やチプが日本の同族や家と同じような「生活集団」であると捉えているが、これは今後検討を要する問題である。

とはいうものの、両班化の概念によって階層移動を捉え、「国民総両班化」といわれる今日の状況は第１のレベルの両班化が完了し、第２のレベルの両班化（人々が「より両班的な」行動パターンを獲得し、両班の要件を満たそうとする現象）であると指摘した点は評価に値する。

岡田が主張する「国民両班化」は、本研究と対応するところが多かったため、先行研究としてとりあげた。

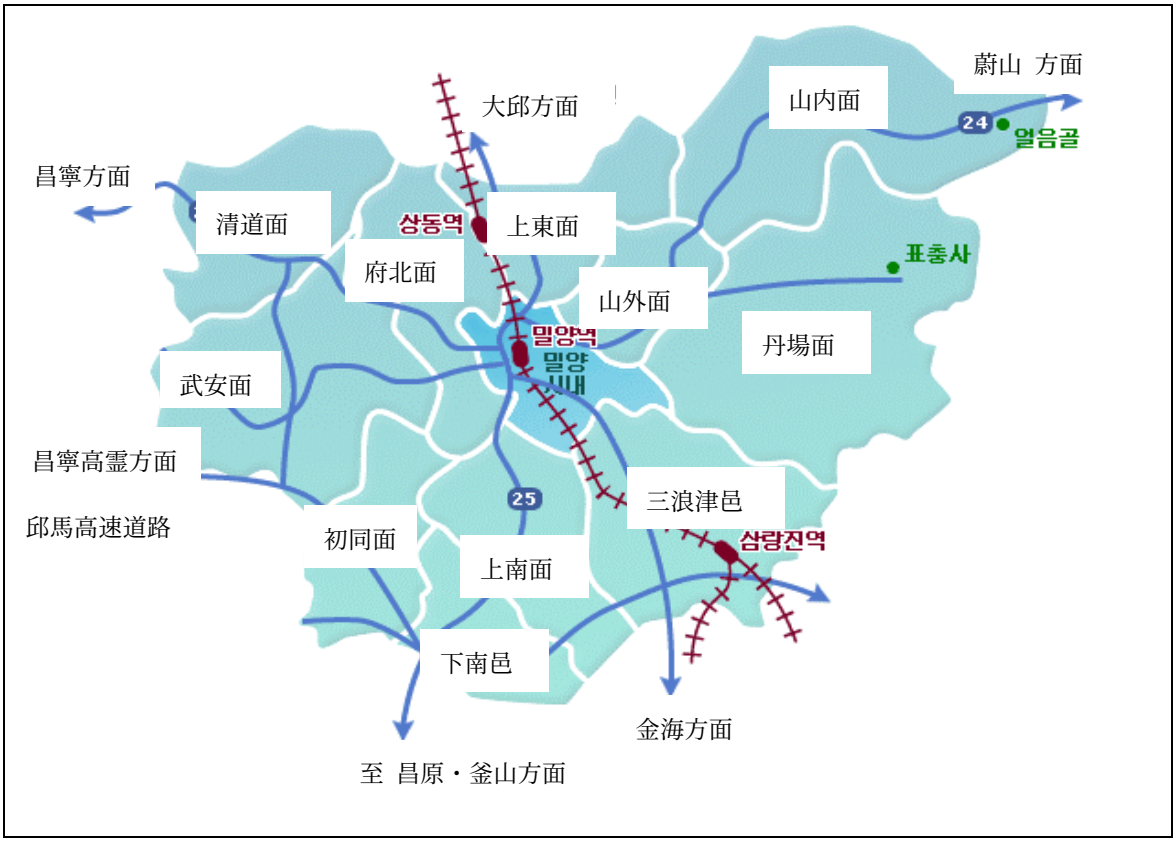
検討の対象として、ここにとくにとりあげなかった他の諸研究も含め、これまでの韓国の民族スポーツに関する人類学的・民俗学的研究を概観すると、

（１）研究の視点は、国家の文化政策に重点が置かれている。

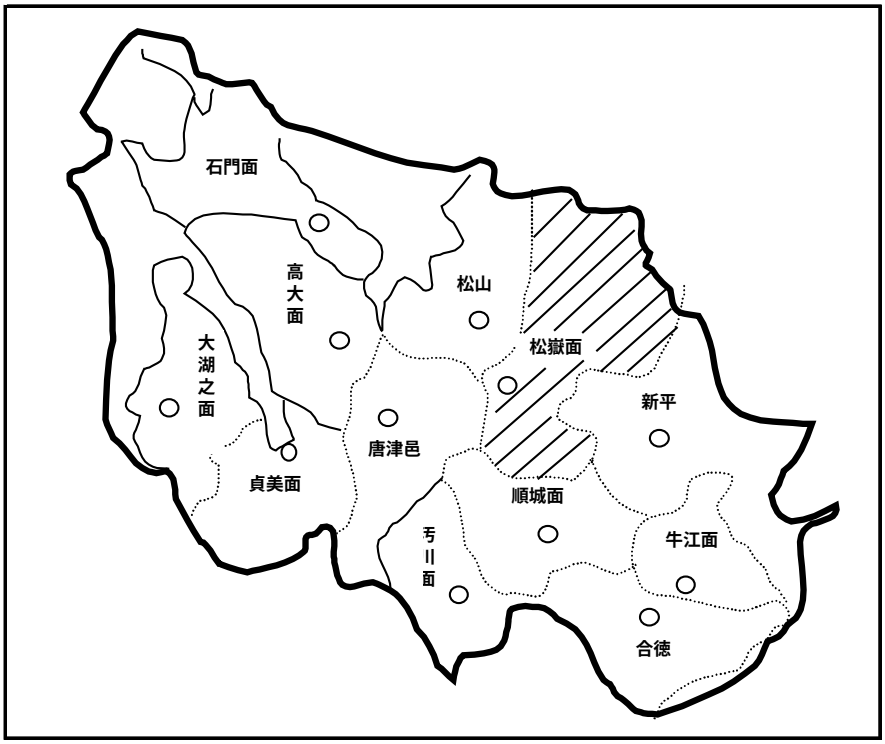
（２）これに対して民族スポーツを創造の視点からアプローチした研究は、若干の研究においてみられるものの、先に検討したようにそれらはさらに深めるべき点、それなりに改められる、あるいは展開して確認されるべき点を含んでおり、民族スポーツの創造に関しては、踏み込んだ本格的研究はいまだ着手されていない段階にあるといえる。

Korean Peninsula
China
Russia
North
Korea
South
Korea
Sea of
Japan
Yellow
Sea
Korea
Bay
Korea
Strait
Japan
China
唐津
密陽
Siping
Huadian
Tumen
Vladivostok
Nakhodka
Khasan
Najin
Musan
Badaojiang
Tonghua
Shenyang
Ch'ongjin
Hyesan
Ji'an
Mang'o
Kanggye
Anshan
Kim'ch'aek
Dandong
Sinuiju
Kusong
Yongbyon
Hamhung
Wonsan
P'YONGYANG
Nampo
Sariwon
P'yongsong
Changyon
Ch'orwon
Haeju
Daejon
Kaesong
Munsan
Ch'unch'on
Kangnung
SEOUL
Inch'on
Wonju
Sewon
Ch'ungju
Ch'ongju
Taejon
Andong
P'ohang
Kunsan
Chonju
Taegu
Masan
Kwangju
Pusan
Mokp'o
Yosu
Hiroshima
Kitakyushu
Fukuoka
Cheju
Cheju-do
Ulleung-do
Tsushima
Sasebo
Demarcation Line
0 50 100 Kilometers
0 50 100 Miles
Boundary representation is not necessarily authoritative.

＜図１＞　韓国全図



＜図２＞　密陽市域の地図



＜図３＞忠清南道の唐津郡域の地図